

ROTARY CLUB OF

KANAZAWA-NORTH



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30~13:30

例会場：卯辰山・ホワイトハウス

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 22-2525

会長：土原一二 幹事：山上啓介

情報委員長：米沢修一

1981・6月25日 第193号

“医学について考える”

金沢医科大学学長

石崎 有信氏



学長で何に苦勞するかと言えは入学式や卒業式等の式辞で何を喋べるかが大変な問題なのだ。そして必然的に医学とは何かを考えるようになった。

明治5年日本の使節として欧米に視察に行った時、個人的な健康保護でなく、国民全般の行政組織があることを知り、日本にも取り入れられた。この時漢方を捨てて、西洋医学を取り入れることに決った。漢方の治療医学として有利性を再検当しなければならぬ問題が起きた。それはその当時国民病といわれた「脚気」である。脚気は元来欧米にはなかったので西洋医学はまったく無力であった。明治政府は富国強兵を進めていたので、民間より多くの脚気患者を出していた。海軍では明治13年に疫学的調査を行い、食物と関係があることに気づき食事の改善をし、明治17年には海軍には脚気が無くなった。陸軍はそれをまったく無視した。森欧外が独国へ留学しルブナーのカロリー学説を取り入れ、カロリーさえあればよいという考え方によっていた。明治43年鈴木梅太郎によりビタミンB₁が発見され脚気はこれの欠乏によると発表された。しかし医学界に受け入れられたのは15年後になった。

臨死患者について我々の時代の医学は人間の生命の質を問わずに長さだけを問題にしている。末期ガン患者についてそれでいいのかと言う問題を投げかけている。いつまでもボケずにポックリ死ねたら文句はないと思う。今後医学はこの様な希望を適える方向に進んでいる。

老化の予防には手を使う趣味を持つことがそれに役立つ。あまりボケないうちに適当な逃げ道を探しておくべきである。

—金沢北RC例会講話から— (文責 小間井宏尚)

一年間をふりかえって

1980～1981会長 土原 一二



文字通りあっと云う間の一年でありました。

どうか皆さんの御協力により会長職の重責を何とか果し得ましてここに厚く御礼申し上げます。創立十周年を三年後に迎える我がクラブとしては、マンネリズムに陥ることなく、専ら「充電」の年に致したいと念じ、

1. 例会を楽しいものにする。
2. 「ロータリーの友」を活用する。
3. 例会出席率の向上を計る。

の3目標を掲げて努力致しましたが、さてどんなものでしょうか。

又、クラークリヒRI会長御提唱の「時間を捧げよう、奉仕のために」の意を体して、貴重な時間の一部を是非ロータリーの為に用いてほしいと会員諸氏にお願いしてきました。

氷見での年次大会、学者ガバナー高瀬氏の公式訪問、意見活潑な小松でのIGF、近くは羽咋での地区協議会等いろいろの公式行事が思い出されますし、又個人的には多数の方々とお近づきになったり、感銘深い講演を承り、いい勉強になりましたことも度々です。

例えば、ロータリー年次大会に於ける慶応大学教授、加藤寛氏は「日本経済と世界の動向」、ロータアクト年次大会での円満院門跡、三浦道明師の「指導者帝王学」、野々市RCの認承状伝達式に於ける、ねむの木学園長・女優宮城まり子氏の「戦^{いくさ}仕度の日々」等の如きです。

その他交換学生ジュディ・ピアンキ嬢の3ヶ月間のホストも大変いい経験になりました。

幸い一年間を通じ、健康に恵れて、思うことが出来たことを喜んで居ります。来年度は、図らずも石川第一分区代理の任務を引続き与えられました、今まで同様、皆さんの御指導御協力をお願い致します。最後になりましたがこの一年間特にお世話になった山上幹事と役員・理事の方々に心から感謝の意を表します。

5RC合同ゴルフで見事団体優勝!!

—— 佶会員個人優勝も ——

6月7日(日) 能登カントリークラブ

●**団体の部** 優勝 金沢北RC 217 (佶・鈴木・桜井)
2位 金沢RC 220
3位 金沢南RC 223

●**個人の部**

順位	氏名	所属	G	H	N
優勝	佶 一成	金沢北RC	92	23	69
準優勝	松本 静夫	金沢RC	85	15	70
3位	村井 利男	金沢南RC	85	14	71
4位	水上 外茂夫	金沢東RC	100	27	73
5位	鈴木 透	金沢北RC	100	26	74
6位	稲場 清	金沢南RC	85	11	74
7位	吉田 国男	金沢RC	94	20	74
8位	桜井 健太郎	金沢北RC	90	16	74
9位	松本 巖夫	金沢東RC	89	14	75
10位	藤沢 昭三	金沢RC	97	21	76



顧 り み て

1980～1981 幹事 山上 啓介



幹事を前任者の塩村さんより引きついで以来、今日迄来られたのはクラブ員皆様のあたたかい御協力と、深い御理解があったればこそと、大変感謝致しています。又、まじめで勤勉な土原会長の指導と、なんでもすぐ大過なく仕事をやってくれた萩原さんのあと押しで、自分の愚かさをカバー出来たものと思って有難く思います。ふり省って見て、私として何が一番印象に残っているかと考えますと、行事面では京都洛北RC交換のお花見夜間例会、並びにゴルフと葵祭り、ポートピア見物のバス旅行であったろうし、勉強面では各委員長宅で主催の立派な炉辺会合と中味の濃い意見交換であった

様に思えてならない。又、初めての試みとして財団基金の提案を夜間例会で取り上げ、分科会形式を通して討議した事は、一步前進した事に間違いはない。

全体的に何事もなく楽しい思い出ばかりと云うのは、運が良かったと、感謝の気持でいっぱいです。

禅宗の寺はどこでも“すりこぎ”と“しゃもち”がぶらさがっています。あれはもちろん身をすりへらして人の為になる事と、不幸で困っている人々を求うと云う大きい意味がありますが、それだけではありません。それは、しゃもちやすりこぎは昔の生活には毎日使用され、なくてはならないものであり、これがなくては料理が出来なかったのです。故に“毎日が禅”とある如く、日々の生活の中から禅が生れ育つと、説いているのです。ロータリーも毎日やっている平凡な仕事の中から生れ育つものであり、奉仕も、人の和も、ロータリーを好きになる事も“毎日がロータリー”と感じるこの頃です。この一年間は、当地区内ではまことに何周年・創立記念・チャータナイト・研修会等々夜となく昼となくたくさんありましたが、もう少し内輪で質素で、静かに物事がなされないものかと考えるのは私だけだろうか。さもあれ小生の幹事在任中に、次期分区代理として土原会長が選ばれた事は、大変うれしく、我クラブとしてはこの上ない名誉な事と云えます。今後も皆んなで協力研鑽し次はガバナーが生れ送り出されるクラブにしようではありませんか。

情報抄録

世界平和への貢献

外国からきている若い人々を国際理解推進の先導者に育てるということは世界平和への大きな貢献である。ロータリーの青少年交換プログラムは、他国の若い人たちにこちらの土地での生活や勉強をさせ、また、こちらからも若い人を他国に出して、お互いに他国の学生を親切にもてなすものである。これはきわめて大切なプログラムである。

10世紀の中国の画家で随筆家の荊浩が言ってい

るように「学を好む若者はいずれは事を成す」のである。皆さんは、青少年交換学生のホストをつとめることを考えておられるだろうか。



